

東京大学大学院経済学研究科教授 小野塚 知二先生

Profile: おのづか ともじ 東京大学大学院経済学研究科教授

1981年東京大学経済学部卒業、1987年同大学院経済学研究科博士課程単位取得、2003年経済学博士。東京大学社会科学研究所助手、横浜市立大学商学部専任講師、同大学商学部助教授、東京大学大学院経済学研究科助教授を経て2001年から現職。政治経済学・経済史学会理事代表、社会経済史学会理事。主な研究テーマは、近現代イギリス社会経済史とイギリス労務管理史・労使関係史で、そのほかに、機械産業史、音楽社会史、食文化史、兵器産業・武器移転史、ヨーロッパ統合史、などの諸分野でも仕事をしている。主な著書に、「第一次世界大戦開戦原因の再検討—国際分業と民衆心理」（岩波書店、近刊）、「労務管理の生成と終焉」（榎一江と共編著、日本経済評論社）など多数。



現代はすでに終焉を迎えているのに 次の主役が舞台に登場してこない現状とは

■ 東大経済学部へようこそ

今日は、経済学と歴史学の境界領域である経済史の中で、政策思想史という分野のお話をします。このような分野だけでなく、東大経済学部では、人間と社会に関係することだったら何でも研究することができます。自分で問題を設定して勉強しなさいというのが東大経済学部の特徴で、多くの先輩、院生、教師の助言、教えることができます。研究の視点もどんどん新しくなっていく。経済学部は、世界有数の図書館、資料室、そして人材も自慢です。経済学部で、いろんな人と出会ってください。そして過去をふまえ、今を知り、未来を展望する、そうした歴史的、実証的な力を付けてください。

■ 近代は本当に「自由な」時代だったのか

さて近代について、世界史や倫社の教科書には、古典的自由主義の時代で、夜警国家が特徴であると書かれています。つまり国家はなるべく何もせず、人々が勝手に自分の欲望に従って自由に経済活動すると、アダム・スミスが言うところの「神の見えざる手」により市場がうまく調節してくれる。これが古典的自由主義、夜警国家です。ところが実際に19世紀を調べてみると、それなりの設計がなされ、それなりの不自由もあります。まず近代社会の大きな特徴は、成人男女の区別があり、さらに子どもという枠があること。そして近代の社会設計の第一は、成人男性は自由であるが自立すなわち自助ができなければいけない。自立とは自分の稼いだ金で自分と家族の生活を成り立たせる経済的な自立です。自由だけれど自分と家族を支える責任がある。残念ながら女性と



子どもは自由ではなかった。近代とは、そういう時代です。自由や民主主義が花開いたのは事実ですが、それは成人男性の自由や民主主義でした。女性と子どもには権利が保証されておらず、成人男性が家長として家族を守る。それが近代社会の設計の2番目のポイントです。そして3番目が大事なんですが、自助できない成人男性もいるわけで、そういう自助できない男とその元にいる家族たちには、救済法に代表される社会的な保護後見の制度が用意されていました。さらに個人的な自助がダメなら、集団的自助もある。集団的自助というのは組合とか団体を作って、そこに毎週少額を積み立てるという保険で、共済組合、労働組合、友愛組合、協同組合などの制度が生まれました。

ところがこうして設計された近代社会ですが、やっぱり無理だということが19世紀末の調査で発見されてしまいます。つまり自助できない人が世の中にはすごくたくさんいるということが分かってしまったのです。

■ 現代は介入的自由主義社会

19世紀末から40～50年かけて近代から現代への転換が始まります。簡単に言えば人間観の転換です。近代は「強くたくましい人」「自立した個」を想定して社会が設計されていましたが、そういう人を標準としても社会が成り立たない。そこで標準的な人間観を「弱く劣った人」に変え、さらに誰かが介入して幸福の方向に誘導してあげるとというのが現代社会の特徴です。第一次世界大戦、大恐慌という二つの世界的なショックを経て、近代社会は現代社会に変わっていきます。

現代社会の思想的な特色を私は介入的自由主義という言葉で表現しています。具体的には単に福祉国家の根幹といわれる社会保険だけでなく、企業の労務管理、成人教育、クラブサークルなどの幸福に誘導する装置も完備されています。現代社会の特徴は福祉国家、企業社会、大衆消費社会、大衆操作の時代といった点にあり、誘導と介入と監視がシステムとして社会中に張り巡らされています。

この現代社会は1968年、世界同時多発的に労働者や学生が立ち上がって反乱状況が起き、終焉が始まります。この反乱は、システム社会における主体性の形骸化への異議申し立てなんです。幸福の方向にルールが敷かれた社会では実際には自分で選ぶことはほとんどない。そういう主体性のなさ、形骸化に対する反発が反乱の原因だったわけです。ところがこのときの労働者や学生の反乱の論拠になった新左翼の言説は幸福誘導のお節介さと同質のもので、問題の解決とはなりませんでした。



■ 現代の終焉に向けて

そして1970年代に入りネオ・リベラリズムが登場します。この思想は介入的自由主義の現代が完成した頃からある古いものですが、広範な影響力を持つようになったのは70年代以降のことです。ここでは個別で個性的な存在の尊厳、自立する個など、現代社会の介入、誘導、保護の仕組みに対する非常に広い忌避感が代弁され、1970年代から80年代に世界各国に勢力を伸ばしました。しかしネオ・リベラリズムの主張は「個人はがんばれ」という古典的自由主義と同じものであり、「自助はすべての人にとって可能ではない」という同じ問題を抱えているのです。

いまは、現代がすでに終わらなくてはいけない時代が来ているのに、退場できないまま、ずるずると舞台の上に乗っている状態です。でも、次の役の人が来ないから降りられない。ネオ・リベラリズムだけ来ても現代を終わることができないのです。次の社会を作れないのです。可能性としての未来、不可能性としての未来が提示できなければなりません。この時代を長続きさせることも一つの選択肢だと思いますが、それも困難な選択といえます。

最後になりますが、第一印象を大事にしてください。理屈ではこうなんだけれども、何かおかしいと感じたら、自分が感じたおかしさのほうを大切にしてほしい。難しいのは、おかしいという感覚は人に伝えられないこと。だから勉強が必要なんです。人に伝わるかたちに自分の感覚を表現する。勉強はそのために必要だと僕は思います。

q î › g Ý t Ù n Z ” C Ý O › m

f`G¶G¶Ä & A¶Z€J-\$ — ú é œ Ě œ \

SwnT q,a f`G¶G¶Ä & A¶Z€J-\$
áf`G¶ & A¶æ Äz á%G¶Ä & A¶Z€J\$œ] o•`{ á & A¶\$œ{f`G¶
p q J ¶ Z € t • z # ¿ e q G ¶ Ž ¶ æ • Ú è £ z % G ¶ Ž ¶ æ • \$ z f`G¶G¶Ä & A¶Z€J•-\$) &
o áT`q i { S í & A ¶ K & A ¶ ¶ q g Ä E`z b q & A ¶ ¶ q g Ä { s Z € Ä`Ú x z Ú q E`æ µ p
q & A ¶ q`æ µ Ñ ¿ g ¶ K Ñ - ¶ p z w, T i z •`Ä ¶ z, b q ¶ z = ¶ z +`Ä K á + 8 ¶ z
ã`é ¿ l w ¶ z s r w - ú ú p`Ä`o M`{ s ¶ { t z H`í H, G`%`j % w 6 U |` M ú Ä q %
: ú g # b { 3 z Ú á æ Ñ ¿ g w \ R q 4 # y`D q z \$ ¶ z Ö S & A`æ p £ s r : {

cF'◁¶íyó J Ga - TM œ \

SS`z y • b { \ y c F'◁¶íó J • Ú è £
áf`G¶ ¶ æ Ä { áf`G¶ J ¶ Z € J \$ œ] o •`{ á`
“cF'◁¶íw-f tqm { fG`” µ | % ”” µ s r } µ ú t Z è { - P | Ú % á | ö í •
• M q Ö p w è (: t t • { G ¶ s r p x } ¶ | æ g ¶ | ¶ g ¶ Ä`Ä`s r } - Q o V h {
¶ { t`f G Ö % ö J t Ä`h`ý ¿, ”” } j`q X # ó ¶ p • Q`ó æ” Ä Ý i ~ # ó Ö
ö J B ± s r ({ t`) ¶ w -`s ¶ í # C`ú g ¶ h j ± s r {

f`G¶œZJ¶U[Z€·ī»”-\$ Ç Ä ~ TM œ \

l i z h m { \ f`G¶œZJ¶U[Z€·ī»” - \$ l z`Ä`Ö i ù · ī »” · ī »” Ö
áf`G¶œ¶æ) Äz°Jö)•oz áÚ±½á”·¿Ä»JG¶Z€»{
áT`qiz á“z`Ä`Ö i ù · ī »” Ö l { • ó x z ° µ Ä Ú \ ú @ ¶ z ° J ¶ z
ú \ ú @ ¶ z B`° µ Ä Ú ú ú { ° x = t T T ”” Ú`é Ñ ”” w µ S Ö i`B`! 0 . w`
; ¿ %`z / B U V S F`½ w`” t s { R`á T`x f G w L ú Q ú f w Z € w Y Ú {
q p ñ a j C Ä, t € B`q`o z y • ¶ } w Z A Q`O i h Q z % á t / B U V S F`½ w H, t · l
q`è`—wK” w J ¶ w` t - y •” {

ú Äxi6pxsX ^6pgrb”

■ **大島** 受験生の方は、大学に入ってこういうことを学びたい、将来はこういうことに取り組みたいという理想を抱いていると思います。でも、現実問題として今は受験勉強をしなければならぬ。同じようなことは大学に入ってからもあると思います。では、理想と現実をどうやって重ね合わせていけばいいのか。それを考えていきたいと思います。

先日、京都大学IPS細胞研究所の山中慎弥先生とシボウムをしたときに山中先生が「ビジョンとワーク」ということを言われて印象に残っています。今回の話にもつながると思うのですが、児玉先生はどのようにお考えですか。

■ **児玉** ビジョンとワークをどう結びつけるか、簡単には語れない面もあるのですが、ワークといわれるものを1つずつしていかにやっていくと、そこからビジョンが見えてくるような気がしています。

たとえば、科学上のことって、1か0かというふうに見てしまいがちですが、実は0.6と0.4かな、0.51と0.49かなと見ていくことが大切で、それがワークと呼ばれるものだろうと思います。そのワークを積み重ねることが研究成果につながっていきます。ですから、ビジョンとワークは別々のものではなく、むしろビジョンとワークをつないでいくのが科学だと思います。

科学では、物事を表面に表れているものだけで判断しないことや、静態ではなく動態、つまり動いている状態のものを理解していくこ

とも重要になります。私は研究者になった頃、日本初のコレステロールを下げる薬の開発にかかりました。それで、薬の作用を確かめる治験をするときに、遺伝的に異常のある人を除いて行って失敗したことがあります。

当時はまだ遺伝的異常のことがよくわかっていなかったという事情もあるのですが、薬は効きやすい人を集めて治験を行えば効くし、効きにくい人を集めて治験を行えば効かない。ですから、統計学的な手法を使って、こういう結果が出ましたといっても、それは統計学の枠内で有効なだけで、物事の真の姿を明らかにしてはいけません。

複雑なものほど、表面的にどう見えるかではなく、その内部構造がどうなっているか考え、真の姿を探っていかなければならないということです。

それから、人間のDNAについて、30億塩基対の遺伝子配列でDNAのことは全部わかったといわれることがありますが、それは嘘です。

細胞は常に動いていて分裂します。30億塩基対がわかった、というのは動いている細胞のある瞬間を静止画で取り出したようなものです。生命は動画であり、そこから取り出した静止画は非常に限られた情報に過ぎないのです。DNAを本当に理解するには動画、つまり動態を明らかにしていくことが必要なのです。

先ほどの話に戻すと、時間の流れを持ったワークを丁寧に見ていくことによって、表面的に見たり静止画で判断するのは違うビジョンが見えてくると言えるのではないのでしょうか。

w-\$s É`_)`iZpx TM`tk”î6UmTŠsM

■ **大島** 児玉先生のお話のなかで統計学のことが出てきましたが、小野塚先生のご専門の経済学や歴史学でも統計学はよく使われる手法ですね。

■ **小野塚** 経済学でも歴史学でも統計学の手法はよく使いますが、背後にある集団などを無視して平均値を取っても実態が見えてこないことがあります。

たとえば、AとBとCとDの1人あたりの国民所得が同じだった場合、その2つの国は同程度に経済が発展しているかというところは限りません。それぞれの国を細かく比較してみると実態は全然違っていました。ですから、統計の表面だけでなく、背後にあるものを見ていくことが必要なのです。

ただ、現実的な話をすると、受験生の方は、文系に進む人でも統計を使いこなせないと大学で学ぶうえで不自由な思いをします。ですから、最低限の統計的手法を使えるぐらいの数学は身につけていただきたいと思います。

もう一つ、児玉先生が静態と動態をいうことを指摘されましたが、経済学でも同じようなことがあります。経済の動態を理論で明確に分析するのは非常に難しい。そこで、まず静態を理論で説明することが多くなります。

私の専門の経済史の研究では、動態を叙述することから始まります。医者が診察するとき、患者にどのような症状がいつから出たか確認するようなものですね。そこから入っていくと、

その動態のなかに何が隠されているかを探ります。その積み重ねのなかで見えなかったものが見えてくるようになるのです。

■ **大島** 平均値で考えるだけではうまくいかないし、静止画で判断できることにも限りがある。空間や時間の広がりの中で物事を理解しようとする姿勢が大切だということですね。

xüwò@)G~t`sU` _ ¿ŠoMX

■ **児玉** もう一つ、若い人たちに言いたいのは、自分の感覚を大切にしてほしいということですね。これが面白いとか、こういうものが大事だという感覚のことです。そして、それにかかわる情報や知識を、生身で感じる感覚と分けないほうがいい。物事から何らかの情報を切り取って知識にすることは必要ではありますが、そういうふうにすると物事が輝きを失うこともあるのです。

だから、面白いと思ったり大事だと思ったことは、自分で見たり聞いたり直に触れるようにする。そして、なるべく見聞を広めていく。そのなかで、物事は一見こう見えるけれど実は違う面があるということにも気がつくようになっていきます。

入試問題でも同じようなことが言えます。私は出題するとき、一見こう見えるけれど実は違うという問題を出します。受験生の裏をかくて、点数に違いが出るようにするためです。逆に言えば、出題者の側に立って考えればいい。Aと書いてあるけれど本当はAじゃないかという

のを見破れるようになると、問題が解けるようになり、受験はうまくいくと思います。

òahqøßQh`q t = b”hŠt) § U ž A

■ **小野塚** 私は昔から勉強が嫌いでしたが、嫌いなままだと苦手が残る。それはそれで悔しいので勉強してきましたが、いまでも勉強は嫌いです(笑)。それはどうということかという、人の書いた教科書や本を読むのはあまり好きじゃないということですね。

私の専門は経済学と歴史学にまがっていて、とくに歴史学者は人の書いた本を読むことが多くなりがちです。でも、歴史学者にとって本当に必要な材料は何かというと、学者が書いた本ではなくて昔の人が書き残した古文書など生の史料なのです。私はそういうものはすごくたくさん読みました。

私は主に19世紀のイギリスについて研究してきた、若い頃は1日に10数時間くらい史料を読んできました。そうすると、頭のなかは完全に19世紀のイギリスになっていて、史料を読み終えて帰ろうと街に出たとき、ここはこの世界だろうという感覚になったことがありました。

それくらい対象にとっぷり浸かってようやくいろいろなことがわかり始める。生の対象に触れるということのすごく重要なことなのです。

それから、私も感覚を大事にしたいということの日頃から言っています。たとえば、第一印象。あれは言語で表現するのは難しいけれど、

ど、最初に感じた感覚は大事にしたほうがいい。何かおかしいなと感じたら、きっとおかしいんです。

ただ、第一印象とか、この音楽が好きだというような感覚は言語化できなくてもいいけれど、学問で自分が感じたことや考えたことは言語化して、ほかの人に伝わるように変換しないといけない。そのためには勉強が必要なんですね。生のものに触れて、感じたことを調べて、理論を立てて、証拠もそろえる。それを最後に言語化して表現するための手段として勉強が必要だということです。

~TM`s\qt “Éœi” xüpöJf`o)§`

■ **大島** お二人から興味深いお話を伺うことができました。最後に受験生の方へのメッセージをお願いします。

■ **児玉** 科学の世界をめざす人は、好きなことより得意なことをやったほうがいいと思います。好きというのは主観的なものですが、得意というのは客観的に判断できます。自分の得意なことにはじっくり取り組んでいくと、いつか人類がいちばん先端に立つ瞬間が訪れるかもしれません。

■ **小野塚** 東大経済学部では、人間と社会に関することだったら何でも研究できます。自分で問題を設定して勉強しなさいというのが特徴で、研究の視点もどんどん新しくなっています。経済学部でいろんな人と出会ってください。そして、過去を踏まえ、今を知り、未来を展望する、歴史的、実証的な力を身につけてください。